



【取組内容】

- 患者一人当たりの治療コストが高く、**国際医療支援の中でも後回しにされがちで注目されにくい小児がんを中心に**、日本国内及び東南アジア各国で、**年間3万件を超える医療活動を実施**。「**治療すれば救えるはずの命**」を治療し、救うことを積み重ねてきた。
- カンボジア国内で唯一、無償で小児固形がんの治療を行う「ジャパンハードこども医療センター」は、多くの人にとって「**命の最後の砦**」となっている。
- 将来的には、周辺国からの患者を受け入れるとともに周産期医療にも力を入れ、現地医療機関との協力体制や日本の大学・医療機関等との連携により、**南南協力・三角協力も視野に入れた医療支援モデルの構築**を目指している。

【評価ポイント】

- 途上国の最前線で、将来的なビジョンを設けながら、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）の実現に貢献。

SDGs実施指針における実施原則（本アワード評価基準）

普遍性	現地政府や自治体、住民と共に医療機関の運営を実現しており、医療拠点の運営モデルとして、他国・他地域にも応用可能。
包摂性	国際医療支援で後回しにされがちな非感染症疾患の治療に積極的に取り組み、「誰の健康も取り残さない」UHCの実現に貢献。
参画型	日本からの年間約800人に上るボランティアの派遣や、現地での「輸血ドナーネットワーク」結成など地域社会の参画体制も充実。
統合性	途上国で医療サービスを受けることができない社会的な問題と経済的な問題の両者の解決に寄与。
透明性と説明責任	年次報告書での活動内容や財務状況の開示、定期的な活動情報の発信を通じて寄付者に報告する体制を整備。



photo by Junji Naito

